第76回 地域おこし協力隊が行く！

実は隣のスゴイ人

曽於市内のスゴイ人にスゴイ人を紹介してもらうこのコーナー。前回のスゴイ人、宮原真弓さんにご紹介いただいたこの方は、「牛の種付けから産まれるまで、神秘的なお仕事をされてるスゴい人」とのこと。インタビュアーは又木志帆でお届けします。

【今回のスゴイ人】
家畜人工授精師・畜産農家
丸山 雄二（まるやま ゆうじ）さん

今回は、末吉町で牛の生産農家をしながら、家畜人工授精師として活躍されている丸山雄二さんにお話を伺ってきました。

丸山さんは末吉町南之郷のご出身。実家も牛の生産農家で幼い頃からご実家の牛舎で牛のお世話をしていました。お父さんも家畜人工授精師で一緒に農家さんを回って仕事の様子を見ていたそう。

高校は末吉高校畜産科に進学。卒業後は大阪の電気屋さんで営業から設置工事などする仕事を6年しました。そして24歳で帰郷し、ご実家の生産牛の仕事をするようになります。

「家畜人工授精師だった父を見ていて、自分もなろうと思い25歳で家畜人工授精師の資格を取得しました。1年目は父にアドバイスをもらいながら仕事を覚えました」

20日周期でくる発情のタイミングを見極め、直腸に腕を入れ牛の子宮・卵巣の状態を手の感覚だけで確認します。種付けのタイミングが分かるようになるまで5～6年はかかったといいます。

「牛のコンディションや食べている餌、飼育状況でも受胎率は変わってきます。牛の状態を見て農家さんと相談し、餌の配合などアドバイスすることもあります」

10～20年前に比べ肉質は上がり完成形に近いといわれている反面、受胎率が下がっていることが全国的な課題になっているそう。

現在丸山さんは約40件の農家さんを回り、４００頭ほどの種付けを行っています。

「自分が種付けした牛が無事に生まれたと聞くと、とても嬉しいですね。せり市で高値で売れたときは自分から農家さんに『よかったね』と連絡することもあります」

家畜人工授精師をしながら12年前に独立し10頭の牛から飼養を開始。自分で種付けして今は34頭の親牛がいます。

丸山さんには4人の子どもがいて、子ども達が子牛にミルクをあげたりお世話をしている様子を微笑ましく見ているそう。今後も子ども達の成長を見ながら、コンスタントにいい牛を出荷して、ほかの農家さんの目標になれるように頑張りたいと話してくれました。

腕を直腸に入れて子宮と卵巣の状態を確認

▶インタビューを終えて

牛を生産するうえで欠かせない人工授精師。牛と向き合うことで、日々やりがいを感じることのできる素敵なお仕事だと思いました。（又木）

協力隊の今日この頃

お疲れ様です。又木です。あっという間に任期の3年が経ち5月をもちまして退任となりました。曽於市に移住して、はじめて見るものや色々な体験を通して、より一層曽於市を好きになりました。また、市報を見てくださる方々に「いつも市報みてるよ」と声をかけられたりと、たくさんの応援をいただけたことも嬉しい思い出です。協力隊の活動では、トマトのソバージュ栽培で収穫したトマトで親子ピザを作ったり、農家さん達と瓶詰を試作したりと楽しい思い出ばかりです。関わってくださった皆さんに感謝です。ありがとうございました。退任後は、お茶とトマトの仕事を両立していけたらと思っています。ほかにも茶畑の隣で茶葉や急須、茶菓子などの加工品の販売をしたいと考えております。お茶とひとをつなぐ場であるようにお店の名前は「お茶あわせ」としました。オープンまで少し時間はかかりますが、ぜひ気軽にお越しください。では、また近いうちに。（又木）

トマトの瓶詰を試作

トマトのソバージュ栽培